

狂気の諸相

——『ダロウェイ夫人』の心理学的考察(その3)——

伊藤太郎

Various Aspects of Insanity

—— A Psychological Study on *Mrs. Dalloway* (Part 3) ——

Taro ITO

Virginia Woolf の *Mrs. Dalloway* (1925年発表) には、心理学的考察の格好の研究対象として非常に興味深い人物が3人登場している。主人公の Clarissa Dalloway, それに脇役の男性陣, Pater Walsh と Septimus Warren Smith の3人である。Clarissa Dalloway については中年女性特有の精神的危機状況に注目し、「女性らしさの病」や「空の巣症状」などの分析を試み、「女性である」ことの両価の意味や女性的生命原理のメカニズム, それに魂の「癒し」の問題を論じた。¹⁾ 又, Peter Walsh については欠陥多きドン・ファン的人物の性格分析の視点から, 優柔不断な現実回避傾向, 「永遠の少年」的退行衝動, 神経症的な女性依存欲求などの病理性を指摘し, 同時に滑稽な「道化」役としての彼の存在意義についても考察を行なった。²⁾ 本稿では, Clarissa Dalloway の Doppelgänger (影の存在) とされる3人目の重要人物 Septimus Warren Smith を組上に載せて, 彼の人生の軌跡を辿りながら死に至る発狂のプロセスを検証し, その狂気と死の意味するものを論じるつもりである。Virginia Woolf 自身が非定型の精神病に一生苦しみ, 絶望の果てに入水自殺をした狂気の作家であったことを考えると, Clarissa Dalloway とは全く違った意味で, Septimus が作家の「思い入れ」の籠った人物であり, 彼の訴える分裂病性の幻覚や妄想は, Virginia Woolf の作家研究にとっても病跡学的な関心を大いに掻き立てずにはおかないのである。本稿はあくまでも神経症や分裂病の精神医学的な症例研究ではなく, 文学作品研究の一環としての人物解析の試みである。本来了解不能な狂気の断面を繋ぎ合わせることで, Septimus の全体像を浮び上がらせ, 彼の狂気の「生と死」に托して作者が我々に語ろうとしているものを考えてみようと思うのである。

I

先ず Septimus の生育歴についての記述を拾って, 彼が狂気に至るまでの足取りを辿ってみようと思う。生育歴とは言っても, その記述の絶対量の少なさには驚かされる。何か後々の彼の狂気の手懸りになるものを探そうにも, 親子関係をはじめとする家庭環境全般についての言及箇所が皆無に近い。但し, 臨床心理学的なケース研究ではないので, 早計に Septimus の狂気の萌芽を幼少期の親子関係や家庭環境に求めるのは, あるいは無意味なことかも知れない。ただ母親については, 若干の言及があって, 彼女が「嘘をつく」(94) 母親であったこと, 「性懲りもなく, 彼が手を洗わずにお茶に降りてきたので咎めて衝突をした」(94) 母親であったことが書かれている。³⁾ 彼がそういう母親を嫌って, それが原因で故郷を捨てたという余韻が

強いので、暖かい母子密着の融合体験をさせてくれる母親ではなかったことは決定的であろう。楽しい家族団欒の主題から逸れた、「手を洗う・洗わない」という些細な辺縁に属する事柄に膠着する捻れたコミュニケーション・パターンを想像してしまう。さらに言えば、嘘を平気でついたり、隠しごとをしたりして子供の心を踏みにじり、自分本位で身勝手な、母性愛の乏しい母親像が彷彿とするのだ。残念ながら父親については言及が無い。ただ、Virginia Woolf の場合、父親に対する抗し難い、愛憎相半ばする両価感情に終生苦しめられて、その父娘関係を含めた家庭因が彼女の精神病の誘発要素のひとつであったと考えられる以上、ここは何らかの信号を是非にも読み取らない訳にはいかない。つまり、何らかの理由で、父親は完全無視できる程に存在感が希薄であり、規範性や権威性も皆無に近く、Septimus が信頼や尊敬を向けられる対象ではなかったのかと推測できる。存在感が薄く、息子の人格形成に影響を及ぼし損ねた父親と、些か旧聞に属する「分裂病を作る母親」ほどのインパクトを持っている訳ではないが、彼の人間に対する基本的信頼感に、何か決定的な不吉な影を落したのではないかと懸念される母親であると結論付けられよう。具体的に述べれば、Septimus が成長してから、如何にも文学青年らしい内向性のためもあるのだが、異性に対して一方的な情熱を滾らすばかりで、自然体の素直な愛情欲求ができずにいたこと、戦友のエヴァンズと同性愛関係に陥り、エヴァンズが結局唯一彼の愛した相手となったこと、結婚相手の若いイタリア娘とは性機能不全からついには性交拒否の状況に追い込まれたことなど、どれをとっても Septimus の対女性関係の病理性を窺わせる。そうした病理性を全て両親、特に母親の責任に帰するのは酷であろうし、見当違いの推論であるかも知れない。だが、母親の暖かい懐の味を余儀なく断念し、家庭を見限り、「ほんのまだ少年」(93)の時に、故郷を捨てて、彼は詩人としての立身出世を夢みて London に上京するのである。早すぎる旅立ちは、反面で彼の自信過剰の、現実遊離した思い込みの激しさを物語るという意味でも、彼の後々の人生に禍根を残すことが予想されるのだ。

大詩人になることを夢みて上京した Septimus ではあったが、しかし London という魔物は容赦なくそうした若者たちを呑み込み、彼らの情熱や希望、勇気や理想を貪って消化吸收し、やがて排泄した。「彼のピンク色の無邪気な卵形の顔が、やせて引きしまり、敵意のある顔になった」(94)のである。彼は内気になり、どもるようにもなった。しかし、自分の顔や名前をなくしたアノニマスな群衆がさまよう大都会の疎外状況の中で、彼もその洗礼を受けて次第に孤立化を深めた訳ではない。もともと非社交的で孤独癖の強い Septimus は、感情表出が乏しく相互依存の情緒的關係が不得手であり、他人との交歓にも逃避的態度をとったことが推測される。他者欲求が乏しい彼には、文化的刺激の強い都会の生活そのものは、ある意味で性に合う環境であったのかも知れない。とにかく彼は、中途半端な教育を受けた後、独学をして、会社勤めを始めるようになる。しかしその会社は競売、価格査定、土地斡旋を社業とする、おおよそ自閉的な空想世界を愛好する Septimus には不釣合いな、現世的・地上的・世俗的な価値に執着する営利優先の会社で、不幸にもそのことが二重性を強いて、彼の内面世界に危機感を与えていたきらいがあるのだ。

昼間なんとか会社勤めをこなしながらも、詩人になる夢だけは未だ捨て難く、夜学に通ってシェイクスピアの講義を受けた。そしてその講義を担当していた Pole 女史に、生まれて初めての(そして最後の)激しい恋をした。しかしそれは男女間の性愛感情ではなく、「熱を伴わない、無限に空霊的で実体の無い炎」(94)のような透明な慕情であった。才色兼備の女神として理想化し、Keats になり変わって彼女に捧げる詩を書き送った。彼女は無情にも、その詩の本旨を無視して、赤インクで添削してつき返した。予想された結果ではあったが、この失恋

の痛手は大きく Septimus は苦悶にのたうった。この一方通行の大失恋事件をきっかけに生活のリズムが乱れ始める。若者にとっての失恋体験が往々にして、分裂病の引き金になるという事実を連想させる程の狼狽ぶりを示すと言ってもよいだろう。彼は、よもやの拒絶をした彼女のことを忘れるべく、狂った様に詩作に没頭する。「傑作を朝の三時に書き終え、外に馳け出して通りを歩き回り、教会を訪れ、ある日は断食し、他の日は酒を飲む」(95)という、内面の葛藤が負荷限界に近いという危惧感を抱かせる程の、一種の病的興奮状態を示すようになるのだ。そして Septimus は、極度に緊張を強いるその危機的状況から逃れるかの様に、誰にも相談をせず、誰にも本心を明かさないうままに、突如祖国を救うためという唐突な理由付けをして、義勇兵に名乗りを上げフランス戦線に赴くことになるのだ。この出征は、結果的に彼にとっては自殺行為にも等しい意味を持つのであるが、発病直前の追い詰められた若者がよくそうする様に、一気に局面の打開をはかって、最後のあがきとして試みた、密かな、しかし危険性を伴う、自己変革の賭けの旅であったのだろう。

わずか数ページの中に、Septimus 自身の心理描写を完全に抜いた形で、発病に至るまでの半生が簡潔にしかも抑揚を押さえた語り口で要約されている。しかし、ことさら平静を装う描写の中にも、やはり彼が狂気に赴くべくして赴いた、発狂を運命付けられた存在であったことを読み取らざるを得ない。狂気を育む素地となつたらしいエピソードと理解するには、些か不親切な説明不足の感が否めないが、元来、狂気の根本原因が何であるか現在でも不明であると言わねばならないのだから、それは暗示の形でしか描きようがないのであろう。

II

Septimus の精神が明らかな異常を来するのは、皮肉なことに、第一次大戦のヨーロッパで「全てが終わって休戦協定が調印され、死者が埋葬された今になって」(96)であった。戦争最後の弾丸が逸れて、彼の傍で炸裂したのだが(彼はそれを無関心に見つめるだけだった)、Shell Shock (弾丸衝撃精神症)が事もあろうに平和の訪れた今になってから、身の安全が保証されてミラノの宿舎に滞在していた Septimus を襲ったのである。自分には「感じがない」、「味が無い」という青天の霹靂のような恐怖に、彼は立ち竦むのだ。

“Beautiful !” she would murmur, nudging Septimus, that he might see. But beauty was behind a pane of glass. Even taste (Rezia liked ices, chocolates, sweet things) had no relish to him. He put down his cup on the little marble table. He looked at people outside; happy they seemed, collecting in the middle of the street, shouting, laughing, squabbling over nothing. But he could not taste, he could not feel. In the teashop among the tables and chattering waiters the appalling fear came over him—he could not feel. He could reason; he could read, Dante for example, quite easily (“Septimus, do put down your book,” said Rezia, gently shutting the *Inferno*), he could add up his bill; his brain was perfect; it must be the fault of the world then—that he could not feel. (PP. 97-98)

これを典型的な離人症というのであろう。突如、自分と外界との間に薄いヴェールのような帳が降りてきて、生き生きとした現実感を霧散させてしまったのだ。何かがおかしいのだ。美が透明の被膜のような窓ガラスの背後に退き、見えることは見えるのだが、手を伸して掴めそうで掴めない気配だ。逆に言えば、外界から疎外されて自分だけが「生」の感動や喜びの届か

ぬ、実存の亀裂の脱色世界の中に隔離されてしまったかの様だ。この感情喪失、味覚喪失は単にそれだけでは終わらない。論理的に考えたり、勘定の足し算はできても、実感を伴う生きた体験の蓄積ができないという由々しき事態である。それは「自分が存在するとは感じられない」或いは「自分が、今、ここに確と存在する」という自己の实在機能の損傷、延いては、端々しく脈打つ自我空間そのものの瓦解を意味するのである。「世界それ自体には意味がない」the world itself is without meaning (98) という衝撃は、有意味的に整合した世界の解体と同時に、彼の自我空間そのものの虚無化＝精神的死に直結するのだ。

このような自らの自我空間の死を主題とする離人体験が、Shell Shock (この呼び方はかなり時代遅れであるようだが) という形で Septimus を襲ったのは、何ら不思議なことではないだろう。砲弾の飛び交う中、常に死と直面した極限状況の中を彷徨い、死臭を嗅ぎ、屍を乗り越えて、いわば自らの「死体験」を潜ってきた兵士が、終戦と同時に「死」と訣別できる訳ではないからである。幸運にも生き延びたとしても、彼らは顔に漂う死相を払拭できない。死の影に怯える宿命を背負うことになるのは充分予想がつく。概ね、戦争神経症という名前で総称されているそのような慢性の神経衰弱状態は、時として離人症状を現出させ、不安や抑うつを主徴とした深刻な情緒障害を伴う場合が多いのである。

Elaine Showalter は第一次大戦下、戦場の兵士たちの間に蔓延したノイローゼのことを詳述している。⁴⁾ 大別すると2種類があって、1つは「男性ヒステリー」と呼ぶに相応しい、外向性の演出型のもので、全身の痙攣や麻痺、手足のひどい震えや硬直、歩行困難、それに声が出ない、飲み込めない、目が見えないなどの多様な身体的症状が特徴であった。このタイプは、特に前線の平の兵卒に多く、耐え難い状況からの逃避という要素を持っていた。もう1つは、内向性の不安神経症に類するもので、神経過敏状態にあって、予期せぬ音や光に反応し極端に驚いたり、興奮したり、失神・卒倒する場合もあった。このタイプは将校に多く見られ、従来の「男たるもの男らしく戦え」式の規範との板ばさみに苦しみ、抑うつ、不眠、苛立ちなどの神経症状が強度に見られた。いずれのタイプも、勿論、長期間苛酷な極限状況を強いられた結果、心身共に破綻を生じてついには戦闘不能となることを意味し、当時大いに世論を湧かした問題となっていた。

Septimus は無論、後者のタイプの不安神経症であるという設定なのだが、後遺症というにはいささか深刻にすぎる症状を呈することになる。戦争体験を契機に、一気に精神病質が花開いて、狂気の道を突き進むことになると言った方が正確かも知れない。いずれにせよ、一般的に戦争神経症は普通のノイローゼとは明らかに異なり、生活能力は衰え、社会適応性は弱まり、人格水準も低下して、もはや以前の健康な生活には戻れないのが普通である。不可逆性の変化を来たすのである。⁵⁾ 緊張、戦懐、嫌悪、悲哀、恐怖、それに絶望といった激しい感情を絶え間なく喚起せずにはおかない戦場において、「死体験」が余りにも強烈であったため、回復不能の一種の精神的麻痺状態に陥ってしまっているのだ。否、戦場で男らしくなったことが殊更強調されている Septimus の場合は、そのような自然の人間の感情を無理に抑圧し、男性的自己統制を徹底し、勇ましく戦いすぎた結果、平和が訪れた今になって、しっぺ返しの報いを受けているのかも知れない。しかし、最初の義勇兵のひとりに名乗りを上げて戦地に赴き、勇敢に戦って十字勲章をいくつももらった Septimus であったのに、武勇を馳せたその代償が、かような精神異常の後遺症であったというのは悲惨すぎる結末である。

この急性パニックのようなミラノでの離人体験を切っ掛けに、新妻を連れて祖国の地を再び踏んで以来、Septimus の精神状態は日を追って昏迷の度合いを深めていくことになる。つまり、

彼の狂気は、単に神経症の段階に留まらず、無味気な分裂症的様相を帯びるようになってゆくのである。極度の疲労困憊の神経衰弱状態の中、生命エネルギーの貯蔵水位が低下し、自我の自律性や統合性が揺いだためか、異様な妄想気分を味わうことになる。例えばボンド街を妻の Lucrezia と一緒に、初対面の誰をも不安がらせるような蒼白の顔で歩いていた時に、Septimus は「何か恐ろしいものが表面まで出てきて、今まさに焔となって爆発しようとしている。(……) 世界が揺れ、おののき、今にも爆発して焔になりそうだ」(18) という確信のある着想を得るのだ。実はその場面は、雑踏の中で一台の高級車がパンクして止まり、高貴な人が乗っているらしいその車に一齐に人々の注目が集まるところなのである。彼は、瞬時、道を塞いでいるのは自分だと錯覚して、衆目の前に無防備なじぶんを晒す恐怖を感じずにはいられない。道を塞いでいるのは他ならぬ自分出あるという自責の念から、「人に見つめられ、指をさされ(……) 重しを付けられて、舗道に釘づけにされている」(18) と信じ込んでしまう。無論これは、第一義的には周囲の状況を冷静に判断する現実認識能力が破綻の危機にあるのが原因しているが、迫害的な注察妄想の色彩を深く持っている点で、大いに分裂病的であると言える。

妄想気分という形で始まった被害的内容の妄想は、次第に Septimus の精神内界を覆うようになり、それを相前後して、幻視、幻聴といった幻覚体験が頻繁に語られるようになる。寝室のドアの外で誰かが話をしている (72) とか、しだの葉の中におばあさんの顔が見えた (72) とか、或いは犬が人間の男に変身しようとしているのが見える (76) などと訴えている。或いは正体不明の見えない存在から合図や通信が送られてくるという関係妄想的内容を思わせる幻覚もある。例えば、リージェント公園のブロード・ウォークのベンチに座っている時に、宣伝文句を煙で描きながら上空を旋回する飛行機を見て、Septimus は「あんな風に俺に合図をしているんだ」(25) と強い確信を抱く。現実の地球上の言葉ではないので、はっきりとはその言葉の意味を理解することはできないだけだと、自分に都合の良い解釈を妄想知覚的に組み立ててしまう (実は煙で書かれた字がすぐに消えてしまうので、他の人にも判読し難いのだ)。或いは、同じ公園の場面で、垣根にとまった雀が幾度も「セプティマス」と名前を呼んでさえずる (28) と錯覚したり、又、「見たまえ」と姿の見えない者が命令内容の通信を送ってくる (実はそれは、ぶつぶつと独り言を言う夫に外界への興味を少しでも持たせようと「ごらんなさいよ」と必至に話しかけている妻の声であるのだが) (29) という事実誤認をしたりする。或いはアパートの居間の壁の中からグロテスクな人の顔がいくつも出てきて、彼のことを悪し様に嘲笑したり、ひどい悪態をついたりしている (74) という幻覚を見たりするのである。

形としては幻覚として姿の見える相手であっても、それはすでに心の内奥まで侵蝕してきている不気味な他者の投影である場合が多い。その見えざる相手とやりとりを交わすという形で、当然のことながら、異常に興奮をしたり、空笑したり、独り言を言う場面が増え、Lucrezia の不安と混乱に拍車をかけることになる。Septimus はある時には何か邪魔な内容の言葉を口にしながら死者と話しをしているし (73)、又、時には虚空を睨み、両手を握りしめ、何かぶつぶつ言っている (75)。又、急に大声で話し始め、妄想の中で人々の質問に答えたり、議論をしたり、笑い、泣き、異常な興奮状態に陥って収拾がつかなくなる時もある (74)。とにかく「もはやこの人は Septimus ではない。別人だ」(73) と Lucrezia を悲嘆に暮れさせるのである。対話形式の独り言は、すでに自我空間の一部をすでに他者に占領されていること—自己の他有化—を証明していて、かなり進行した第二段階の夢幻様状態の錯乱に移っていることを示すのである。

Ⅲ

しかし、Septimus が常に迫害的・被害的内容の妄想に苦しみ、狂気に絶望しようとしている訳ではない。絶えず実存的不安の淵に立って足を竦せながらも、時としてその合い間合い間に、生命感情が高揚し、脱魂の恍惚に近い、一種の幸福感に浸る場面も用意されている。「死体験」を潜ってきた者にしか実感できないような、束の間の安らぎの瞬間なのであろう。しかも瞬時に、突如に、不意に、と言う訳ではないのであるが、絶望が恍惚に、逆に恍惚が絶望にと、割と何の前触れも理由もなく反転するのが特徴的であると言え言える。本質的には、「恍惚－絶望」を基軸とした非定型精神病に親和性のある心理・行動パターンを内包させているのが Septimus であると言えるだろう。V. Woolf 自身も、この神経症でも分裂病でもない(それらの両方の要素を合わせ持つ) borderline 的な非定型精神病であったことは先に述べたが、彼女の説く「存在の瞬間」the moment of being に於ては、絶望的な悲しみや恐怖に捉われ、身体的な麻痺・虚脱状態に陥るが、それが次の瞬間には一転して自己充足の恍惚感に変わることが多く、それが Woolf 的な離人症の一大特徴となっていたのだ。Septimus ほどの浮き沈みの落差はないが、同様のパターンで「生」の歓びと不安を奏でているのが Clarissa Dalloway であった訳だ。因みに、*The Waves* の Rhoda (彼女は明らかな精神分裂症である)も、Septimus と同様に、「生」への憧れや歓びを自我空間からの脱出・解放の形で、又、「生」の恐怖や絶望を自我空間の消滅・溶解の形で表現している。

他者の侵略に怯え、分裂症性の迫害妄想を抱く Septimus が、何故に、自我解放を果たして「生」の歓びの歌を謳う人物たり得るのだろうか。Septimus の病理性を孕む自我空間の仕組みを説明するには、自己と外的世界を隔てる「自我境界」の概念を導入するのが妥当だと思う。ここでいう「自我境界」とは、ある一定の領域を占めながら、外界とは明確に区別されうる存在として「自分が今、ここに厳として実在している」と確信する領域性の感覚のことである。Septimus の場合は、この自我境界の被膜が非常に脆弱で、簡単に破れやすく、外的脅威の闖入や不気味な他者の侵入を容易に許してしまう。元来、自我境界は適度の強度と柔軟さを兼備して、自我空間を外界より守る緩衝帯としての自我防衛機能を発揮せねばならない。しかし、Septimus の自我境界は崩壊の憂き目を見て、あってなきが如くの心許無さである。つまり、自我防御膜としての機能を担わされた彼の肉体は、世界の狂った熱波のために「溶かされてしまっていて、今は神経繊維だけが残っている。そしてヴェールのように岩の上に広げられた」(76)のである。緩衝物としての肉体が溶解しているために、神経組織が無残にも曝け出され、外界の脅威の直接攻撃に怯えねばならなくなる。繰り返し述べてきた被害内容の妄想をはじめ、思考吹入、思考干渉、被影響体験等々の分裂病の典型的な症状とされているものは、どれも何らかの理由で自我境界がその機能を発揮しなくなったために、自我内奥へ外部から侵入が起こったものと総括できる。

外部から内部への疎通・侵潤が可能であるならば、当然、内から外への反転も可能ということになる。自我空間に充満するほどの生命エネルギーが貯えられることはほとんど期待できないから、Clarissa Dalloway ほどの積極的な自我解放や自己充足の歓びは望むべくもない。しかし自我境界が希薄になるにつれて、逆に近代人の自我意識の壁がはずされるのか、「個」としての限界が没却し、原始レベルに退行したような外界との神秘的一体感や融合感を幻想体験できるのである。

Happily Rezia put her hand with a tremendous weight on his knee so that he was weightted down, transfixed, or the excitement of the elm trees rising and falling, rising, and falling with all their leaves alight and the colour thinning and thickening from blue to the green of a hollow wave, like plumes on horses' heads, feathers on ladies', so proudly they rose and fell, so superbly, would have sent him mad. But he would not go mad. He would shut his eyes; he would see no more.

But they beckoned; leaves were alive; trees were alive. And the leaves being connected by millions of fibres with his own body, there on the seat, fanned it up and down; when the branch stretched he, too, made that statement. The sparrows fluttering, rising, and falling in jagged fountains were part of the pattern; the white and blue, barred with black branches. Sounds made harmonies with premeditation; the spaces between them were as significant as the sounds. A child cried. Rightly far away a horn sounded. All taken together meant the birth of a new religion——

(P P. 25-26)

公園のベンチに座っていて周囲の木を眺めている場面である。画像全体が波打っていて、焦点が定まらないような彼の視野の中であって、木が主役・主題として前景を占めている。風に揺れてか、しきりに上手運動をしている枝。木々のざわめきや振えや息遠いが手に取るように感じられる。生きている木と自分が何百万もの繊維で繋がっていて、ふるえる木々の律動のひとつひとつに自分の体も共鳴振動する幻覚体験をみる。空間的な距離感がすでに狂っているので、心理的距離をつめて、木々がぐっと間近に迫っている程の異様な存在感だ。「木を伐ってはいけない。ある種の神が存在しているから」(28)という別の記述を考え合わせると、樹木崇拜、木への aminism 的親近感が窺える。木がある種の威厳性や神秘性を備えていて、神の創造力の微とも考えられているから当然だろう。神にも通じる自然の生命体への幻想的融合感一少なくとも、このような神秘体験は、我執にとらわれ、強き者が弱き者を迫害し支配するというあの忌まわしい人間世界とは無縁の世界なのだ。木が手招きするという親愛行動が、彼には自分を発狂へと誘う魔の手だと思えて、思わず目を閉じようとしたのだが、である。木が親愛の合図を送る幻覚の図は、神秘の誘いでもあり、又、狂気の予兆でもある。

自我境界が破綻しているということは、結局、外界から侵入されるという狂気の恐怖と、個からの解放という神秘的な高揚感を、常に裏腹に合わせ持っているということである。気分が高揚している時にこそ Septimus は、自分は「人類で最も偉大な人間で、最近、生命の世界から引き抜かれて死者の仲間に入れられた者であり、社会を更新するために、世につかわされた主である。(……) 永久に苦しむ生贄の小羊、永遠の苦惱者だ」(29)という救済者妄想や、自由になって高みに立った今、神から学んだ秘密の真理を世の人々に伝えねばならない(75)という召命感などを抱くのである。

But he himself remained high on his rock, like a drowned sailor on a rock. I leant over the edge of the boat and fell down, he thought. I went under the sea. I have been dead, and yet am now alive, but let me rest still, he begged (he was talking to himself again-it was awful, awful!); and as, before waking, the voices of birds and the sound of wheels chime and chatter in a queer harmony, grow louder and louder, and the sleeper feels himself drawing to the shores of life, so he felt himself

drawing towards life, the sun growing hotter, cries sounding louder, something tremendous about to happen. (P 77)

「波間に漂う」、「波間に沈む」、「溺死する」、そして「岸辺に打ち上げられる」という一連のテーマは、とりわけV. Woolf 的な生命原理を考える場合に大切である。誤解を恐れずに補足しておく、液体をつめた透明被膜の風船体（自我）を水中（外的世界）に投げ入れて、水に浮ぶ、波間に漂う状態が、内と外のバランスのとれた精神安定の状態であると言えよう。自我被膜の防衛機能が損傷して浸水すると、自我空間は一気に沈没・溶化（＝自我消滅）の危機に見舞われるのだ。Clarissa Dalloway が「人魚」として海中でも生存できる存在であったのとは違い、Septimus は一度は海底に沈んで死なねばならなかったが、しかし彼は今生き返っていて、高い岩の上で瀕死の重傷の体を休めている。戦場から生還したのと同じ意味で、彼は海底の暗黒世界から蘇えったのだ。再三にわたって繰り返し言及されるこの幻覚体験が、いみじくも発狂の危機に瀕しながらもかすかに呼吸をしている彼の自我空間の必死の生の営みを示唆するのである。

IV

最後に、Septimus の存在意義を整理するために、彼を診察し、そして結果的に彼を死へ追いやる迫害者の役割を演じた二人の医師について触れておきたい。分裂病症の妄想は、注目すべき大きな特徴として、そのほとんどが「適一昧方」、「善一悪」といった単純な二項対立の図式をとる。妄想体系を確立して、外的現実には代わる個人神話の世界を再構築するためには、神話素の単純化が要請されるというのだ。⁶⁾ 二人の迫害者は、「死」の戦場から帰還した再臨した救済主を、再び追放し、幽閉し、息の根を止めようとした悪魔的存在という役割を担わされたという訳だ。先ず、最初に診察した開業医の Homes を見てみよう。彼は大柄な、頑丈な体格の男であるが、瑞々しい顔の色艶など、如何にも医者らしく己の健康に気を遣っているのがわかる。鏡に映る自分の姿に（端正な顔立ちを確認するために）見入る仕草が、表面的な格好の良さだけに関心を払うタイプの男の、人間性の底の浅さと中身の無さを逆に浮き彫りにする。偽善的な俗物根性の持ち主であることが一目瞭然である。彼の無知・無能ぶりには、Septimus の訴える頭痛や不眠や恐怖や夢を全て無視して、「別状はなし」の誤診を下す時に暴露されてしまう。そして、女性には特に親切で、商売人のような愛想の良さを売り物にしているのだが、その優しさの仮面の下に、Sir William Bradshaw と同じ強権発動的な高慢さを隠しているのだ。妙に慣れ馴れしい態度で接近し、接触してくる Homes 医師も、すでに距離感覚が狂って、対人距離に極度に敏感になっている Septimus にとっては、「人間性が襲ってくる」(102) という恐怖の対象でしかあり得ないのだ。

もう一人の医者 Sir William Bradshaw は、ハーレー街でも有名な（神経症にかけては当代随一との評判を持つ）精神科医という設定である。彼は、実は、Virginia Woolf を実際に診察して彼女に「療養所」行きを勧めた実在の高名な精神分析医の Sir Henry Head の、その戯画化した caricature であることが判明している。⁷⁾ Virginia Woolf が如何に Sir Henry Head を恐れ、憎み、蔑んでいたかが十分に窺える程の、徹底した揶揄が、その caricature には加えられている事実は注目に値する。「個人的利害を持ち込まず」という創作にあたっての detachment の法則を取って無視し、患者として受けた生の恨みを末昇華にしたまま、激しい非難の刃を向けている所が、この小説の唯一の欠点であると言え言えないこともない。しかし、

確信犯を覚悟してまで、そうした些か平板に随している、図式的にすぎる描写に終始しているのも、本来 Virginia Woolf にとっての創作の意味は何かを考える上で面白い。ともあれ、この Bradshaw は Homes とは違って一目見るなり、Septimus が重症であること、「完全なノイローゼ——肉体的・精神的消耗の状態で、あらゆる末期的徴候を見せている」(106) ことを見抜き、彼にとっては死刑にも等しい「療養所」行きを宣告する。

幾分滑稽だが、少しステレオタイプに陥っている Bradshaw に関する描写を要約すると、彼が「均衡観念」*a sense of proportion* (107) の秀れた持ち主であることが強調されている。これは科学的合理精神と呼ぶべきもので、これを錦の御旗に「科学の精神的助手、かつ科学の司祭」(104) たる Bradshaw は、「結局我々には何もわかっていないこと——つまり精神系統や人間の頭脳のこと」(109-110) に、臆面もなく領空侵犯し、狂気と正気を区別・分類するのだ。魂の神秘の聖域を侵し、人間の尊厳を傷つけ、「狂人を隔離し、出産を禁止し、絶望を罰する」(110) のである。Bradshaw が信奉するこの「均衡観念」という女神には、さらに恐ろしい「回心」*Conversion* (111) という妹分の女神が表裏一体でくっついている。こちらは、博愛的啓蒙精神とでも呼ぶべきものであって、彼は隣人愛や自己犠牲の麗しき仮面をつけながら、その実「反対する者、不平を言う者たちを荒々しく打ちのめし」、「生き血を愛し、非常に巧妙に人間の意志を貪り食う」(111) のである。

そもそも科学的合理主義も、博愛的啓蒙主義も、他を見降す独善的な優位性を絶対の前提とするところが共通している。全体を見渡す高みに立っているという自己認識があればこそ、全ての事象を白日の下に照らし出し、暗黒の闇を開拓し、野蛮や無知を追放できると信じるのであろう。己の知識や信仰や秩序を、劣位の者に押しつけるその高慢さにえてして気付かないことが多い。Virginia Woolf に言わせれば、きっと因襲的な男性優位主義もそれらと同じ範疇に入れるべき忌わしい遺物ということになろう。男性原理は、時として *chauvinism* 的独断性でもって、物事の価値判断を下し、裁定し、優劣の序列をつけたがる。そして往々にして、異質なものを排除し、攻撃しようとする。元来、意に沿わぬ敵を倒し抹殺しようとする攻撃・破壊衝動は、男性的要素だとされてきたのである。さすれば、ヒューマンイズムの美名のもと、戦争という未曾有の大量殺戮を堂々とやってのけた男性優位の現代文明は、その犯罪行為を正しく犯すべくして犯したことになる。そういう戦慄を当時のヨーロッパの知識層は身をもって体験し、そして回復不能の、自信喪失の抑うつ状況へと陥ってしまったというのである。

Septimus の神経を完璧に破壊し、狂気へと至らしめた、直接の原因となったものは、悲惨な戦争体験であった。文明は、人類のため、民族のため、国家のため、宗教のため、イデオロギーのためという空虚なお題目を平気で掲げて、前途有為の若者たちを戦場へ駆り立て、そして狂気や死へと追いやる。戦争は、支配・所有・占領という人間に固有の男性的本能に根ざした、大掛りな殺人行為であったのだが、二人の医者 Homes と Bradshaw が体現した忌むべき人間性も、それと同じ支配と所有の欲望に血塗られていたという訳である。分裂病患者が、人間関係を「支配—服従」の基本レベルに還元してしまいがちなのは（だから被害妄想を抱きやすくなる）、彼らの精神内界が原始的本能レベルに退行しているからだろうが、Septimus は、だからこそ、彼らの偽善の皮を剥いで正体を暴く告発者となり得た、という逆説が生まれる。Clarissa Dalloway が男女の性愛を忌み嫌ったのも、彼女がそこに「支配—服従」の構図を見抜いていたからに他ならないことは言うまでもない。彼女もパーティーで出会う Bradshaw に本能的な嫌悪感を抱くのであるが、彼らは治療という真っ当な営利行為の中で、内に秘めた支配欲や攻撃衝動を合法的に昇華しつつ、他者を脅し、迫害し、拷問し、そして支配する。患

者を奴隷のように己の意志の前に跪かせるのである。「裸で、防御物もなく、力尽きた人々、友を持たぬ人々は、Sir William Bradshaw の意志の刻印を受けた」(113) のだ。

Septimus は、人間関係能力に病理性を埋め込まれた、元来が孤独で、対人欲求の乏しい若者として描かれている。正常な他者との関係維持が人間存在にとって極めて重大な危機を招来するという意味で、彼は当初から狂気に赴くべき運命を背負っていた。又、第一次大戦の戦場で精神に異常を来した若者を代表する形で、死の臭いを芬芬と振りき、そして散った。彼は分裂症性の被害妄想という狂気の装いを纏って、人間性の忌むべき本性や、社会や文明の呪わしい本質を告発したのである。何かがおかしいという今日的状況の不安や恐怖に怯えながら、狂気に至るプロセスを生々しく披瀝しつつ、外的世界の「狂い」を身をもって実地検証する役割を演じたのである。社会状況に何の危惧の念も覚えず、いわば安穩とした有閑婦人の役に徹することで、逆に皮相的な人生に埋没する、社会性を剝奪された個人の精神的危機を体現したのが Clarissa Dalloway であった訳だが、彼女の社会性の無さを相補的に保障する存在として Septimus が登場しているとも言えよう。その意味で、正しく、彼女の Doppelgänger 役を見事に演じているのである。狂気の人 Septimus の存在なくしては、この小説は到底社会小説たりえないのである。

註

- 1) 拙稿「中年女性のための鎮魂曲——『ダロウェイ夫人』の心理学的考察——」(名古屋女子大学紀要, 人文・社会編, 第35号所収)
- 2) 拙稿「愛すべきドン・ファン, ピーター・ウォルシェ——『ダロウェイ夫人』の心理学的考察(その2)——」(名古屋女子大学紀要, 人文・社会編, 第36号所収)
- 3) 『ダロウェイ夫人』のテキストには, *Mrs. Dalloway* (London: The Hogarth Press 1968年版) を使用した。なお作品中より本文引用の場合は, 括弧内の数字によりその引用頁を示すものとする。
- 4) Elaine Showalter, *The Female Malady —— Women, Madness, and English Culture, 1830-1980* (1985), p 201
- 5) 宮本忠雄, 『現代の異常と正常——精神医学の人間学のために』(平凡社選書, 1980), p. 155
- 6) 昼田源四郎, 『分裂病者の行動特性』(金剛出版, 1990), p 165
- 7) Roger Poole, *The unknown Virginia Woolf* (1978), p 143

参 考 文 献

- 1) 宮本忠雄, 『精神分裂病の世界』(紀伊国屋書店, 1978)
- 2) 同, 『心がなくなる——病いとしての現代』(思潮社, 1983)
- 3) 小出浩之, 『分裂病と構造』(金剛出版, 1990)
- 4) 木村敏, 『直接性の病理』(弘文堂, 1986)
- 5) 中安信夫, 『初期分裂症』(星和書房, 1990)
- 6) 安永浩, 『分裂病の症状論』(金剛出版, 1987)
- 7) 宮本忠雄, 『精神分裂病の精神療法』(金剛出版, 1987)
- 8) 荻野恒一, 『分裂病の時代』(朝日出版社, 1984)